

ビヤンフィラートルのお嬢様方

テオドール・ド・バンヴィル氏⁽¹⁾へ。

光を！……

——ゲーテ臨終の言葉

パスカルがわれわれに言うところでは、事実という見地からすれば〈善悪〉とは《緯度》の問題である。⁽²⁾ 実際、人間のしかじかの行為は、ここでは罪と呼ばれるが、あちらでは善行と呼ばれるのである。逆もまた然り。——たとえば、ヨーロッパでは一般に、自分の年老いた両親を慈しむ。——アメリカ大陸におけるいくつかの部族では、老親に説いて木に登らせ、それからこの木を揺すぶる。もし彼らが木から落ちれば、孝行息子は誰しも神聖な務めとして、かつてメッセニア人⁽³⁾において習わしであったごとく、即座に斧^{トマホーク}の強烈な数撃で打ち殺してしまふ。両親に老衰の心配を免れさせるためである。もし彼らに、どれか枝にしがみつく力があるならば、まだ狩や漁の役に立つことであり、その際殺戮は猶予される。ほかの例を挙げれば、北方の諸民族は、懐かしき太陽のまどろむ輝ける波と形容しつつ、好んでワインを飲む。われわれの国民的宗教が、「美味なぶどう酒は人の心を喜ばせる」⁽⁴⁾と警告さ

えしているほどである。南方の隣人たるマホメット教徒において、当の行為は重罪と見なされる。——スパルタでは、盗みが実践されるとともに崇敬されていた。それは宗教上の制度であり、あらゆる真摯なラゲダイモン^{ラゲダイモン}なスパルタ人の教育に欠くことのできない補習だったのである。そこに、おそらく、ギリシア人の窃盜癖は由来している。——ラップランド^{ラップランド}では、家長はその娘が、自宅に迎えた旅人から、ありったけの愛想をもって言い寄られる対象となることを名譽とする。ベッサラビア^{ベッサラビア}でも同様である。——ペルシアの北、太古からの墳墓に住まうカプールの未開人たちのところでは、どこか居心地の良い墓のなかで懇切なる歓待を受けた後、二十四時間以内に、主人たるゲール人、バルシ人、あるいはワハビット族^{ワハビット族}の、娘たちすべてと契りを結ばなければ、いともあっさり首を斬られてしまうものと覚悟しなければならぬ。——それはこうした風土において流行の刑罰なのだ。したがって、もろもろの行為は、物としてみれば差別するところはない。各人の意識のみが、そうした行為を善や悪とするのである。この多大な誤解の根底に存する不思議な点とは、《人間》が自分のためにさまざまな区別や懸念を作り出し、その国の風にあれやこれやと吹き込まれたのに応じて、ある行為を別の行為よりも自肅しなければならなくなるような生来の必要性である。要するに、まるで《人類》全体が、何か失われた《法》を忘却してしまい、手探りで思い出そうとしているかのようだ。

数年前、われらが大通りの誇りとする、とある広大で光まばゆいカフエ^{カフエ}が繁盛していた。破風^{破風}が異教寺院のそれを想起させる、当世風俗劇場の一軒^{一軒}のほば正面の位置である。そこには、後に芸術的な価値や、あるいは無能さや、あるいはわれわれが横切った動乱の日々における態度によって頭角を現す若者

たちの中の、選ばれた者が毎日集っていた。

最後に述べた若者たちのうちには、〈国家〉という戦車の手綱を取った者さえいる。⁽¹⁰⁾ おわかりのように、この千夜一夜のカフェにあるのは、取るに足らぬビールなどではなかった。パリの市民がこの伏魔殿について話す時は、必ず声をひそめたものである。しばしば、市長はそこに、訪問の名刺のように無造作に、巡査の不意の花束、選り抜きの一束を投げ込んだ。巡査たちは、独特な上の空のにこやかな様子で、戯れに彼らのイヴニングコートの端「⁽¹¹⁾」を振るいつつ、いたずら好きで茶目つ気のある連中を追い払うのだった。手心は加えられていたが、それでも手厳しい注意だった。もつとも翌日には効果の跡形もなかったが。

テラス席には、辻馬車の列とガラス窓との間を、芝生のように埋め尽くした女たちが、ギースの筆から抜け出てきたかのような^{シニヨン}花咲かせ、ありそうもないような化粧で飾り立てては、椅子にゆったりと腰を据えていた。かたわらには希望の緑に塗られた錬鉄の小円卓が置かれている。円卓の上には飲み物が運ばれる。目は禿鷹や鶏に似ていた。ある女たちは膝の上に大きな花束を載せ、別の女たちは小犬を抱き、また別の女たちは何も持っていなかった。みな、誰かを待っているかのような様子だった。

こうした若い女たちの中で、二人が勤勉さで目立っていた。この名高いホールの常連たちは、彼女たちをごく簡単に、オランプにアンリエットと呼んでいた。二人は黄昏時にはもうやってきて、奥まった、煌々と明るい場所に腰掛け、実際の欲求というよりむしろ体裁をつくらうために、^{ツェストロ}薬酒の小杯か《マザ

《^(E)グラン》を注文し、それから細心の目つきで通行人をじっと見守るのだった。

そしてこれがビャンフライートルのお嬢様方だった！

二人の両親は、不幸の学校で育てられた、非の打ち所のない人々で、彼女たちに見習い奉公の喜びを味わわせる手立ても持っていなかった。というのも、この謹厳な夫婦のなりわいは、主として、間断なく、絶望的な身振りで、正門の錠前につながった長い撚り紐にぶら下がることにあったのだから。つらい仕事だ！ しかも得られるものといえば、辛うじてぼつぼつと投じられたわずかな喜捨を、拾い集めることぐらいなのだ!!! 富くじの当たり数字も夫婦にはついぞ出たことがなかった！ そのためビャンフライートルは、朝となればちよつとしたキャラメル酒をこしらえながら、悪態をついていたのである。孝行娘のオランプとアンリエットは、早くから、家計を助けねばならないことを理解した。ごく幼少の頃から春をひさぐ姉妹となった二人は、門番小屋の、つましくはあるが、それなりにゆとりある生活を維持するために、自分たちの不眠と汗という代償を捧げたのである。——「神様は私たちの努力を祝福してくださいませ」と、時折二人は語ったものだった。というのも、彼女たちはよき道徳的信条を教え込まれていたからであり、遅かれ早かれ、堅固な信条に基づいた最初の教育は、実を結ぶものだからである。時に激しすぎる労働が、健康を損ないはしないかと気遣って尋ねられることがあると、二人は慎重深い穏やかな当惑した様子で、眼を伏せながら、言葉を濁しつつ答えるのだった、「ありがたいことに、気慰みはございますので……」

ビャンフライートルのお嬢様方は、いわゆる「夜に日に継いで働く」労働者だった。二人は（世間の

ある種の偏見に鑑みれば）実りなく、しばしば苦勞の多い務めを、あたらかぎり立派に行っていた。彼女たちは勞働によつてできる神聖なる胼胝を、不名譽なものとして排するような閑人ではなく、それを恥じることもなかった。二人については、モンティヨン⁽¹³⁾の死灰も美しい記念碑の下で身震いしたにちがいないほどの、いくつもの美談が語られたものである。——とりわけ、ある晩は、年老いた伯父の葬儀代を支払うべく、彼女たちは競争心から張り合い、奮発してみせたのだつた。といつても、この伯父が二人に遺したものと言へば、かつて幼い日々振る舞われた、数々の平手打ちの思い出にすぎなかつたのだが。このようなわけで彼女たちは、敬すべきホールの常連全員から、折り合いの悪い人々も含め、好意的な目で見られていた。親愛のしるし、手で送る挨拶が、いつも彼女たちの眼差しや微笑みに応えていた。かつて誰からも叱責や不平を向けられたことはない。二人の人づきあいが穏やかで物柔らかであることは、各人が認めていた。要するに、彼女たちは誰に対しても何の負い目もなく、すべての契約を履行し、したがつて、誇り高く頭を上げることができたのである。模範的な女性である二人は、不測の事態に備え、《いづれつらい時のため》、いつか商売から立派に身を引くために、貯金をしていた。——堅実にも、日曜日には休業した。賢い娘たちだったので、若い伊達男どもの言葉にはまったく耳を貸さなかつた。この連中の取り柄といへば、若い娘たちを義務と勞働の堅固な道から踏み外させることしかないのだから。当節、恋愛で無料なものは月の光ぐらいたと二人は考えていた。二人のモットーは〈迅速・安全・秘密厳守〉であり、名刺には〈専門技術〉と付け加えられていた。

ある日、妹の方のオランプが墮落してしまつた。それまで非の打ち所のないこの不幸な娘は、誘